

# 観照と感動

## ——『法華経』と『ルカ福音書』の照應——

小畑 進

第一章	妙法蓮華経について	2
(1)	法華経伝通史	3
(2)	法華経の内容	4
第二章	《長者窮子》の譬喩	5
(1)	「信解品」の解題	5
(2)	《長者窮子》の内容	6
第三章	《放蕩息子》の譬喩	11
(1)	《放蕩息子》の内容	11
(2)	成立年代の関連性	12

第四章	《長者窮子》の教説	12
-----	-----------	----

(1)	佛教々理的解析	12
(2)	一般的説法	15

第五章	《長者窮子》と《放蕩息子》	17
-----	---------------	----

(1)	両譬喩の対照	17
(2)	両譬喩の特性	20

第六章	財産相続と父子邂逅	22
-----	-----------	----

(1)	財物と“出合い”	22
(2)	兄の不平・天の父	26

〈注〉	.....	28
-----	-------	----

## 第一章 妙法蓮華經について

佛教の彪大<sup>ほうだい</sup>浩翰<sup>こうかん</sup>な經典群の中で、最も有名なのは『法華經』でしょう。サンスクリット語原典の題名はサッドハルマブンダリーカ<sup>(1)</sup>と言ひ、「白蓮<sup>びやくれん</sup>のごとき正しき教え」、あるいは「正しい教えの白蓮」と訳されるのですが、普通には『妙法蓮華經』、略して『法華經』と呼ばれます。

佛教宗派の数多しといえども、『法華經』の影響をこうむらぬ宗旨は、ほとんど無いと言われて、およそ佛教を学ば

んとするものは『法華經』を理解せざるべからずとされます。これを文学の上に照らして見ても、『源氏物語』、『栄華物語』、他に日記類、戯曲、謡曲など、『法華經』の知識なくしては完全な理解を期しがたいものが少なくありません。

# (1) 法華經伝通史

この『法華經』がインド、中国をへて、日本に渡来したのは、敏達天皇 (AD. 572-585) の時であると言われていますが、これを熱心に弘めた先人として有名なものは、かの聖徳太子で、推古天皇十四年 (AD. 606) には、岡本の宮で法華經講義がなされ、その義疏、つまり講解書が著作されました。すなわち、『法華義疏』四卷です。

その後、聖武天皇の天平六年 (AD. 734) には、『法華經』と『金光明最勝王經』とが、僧侶を得度させるときの国家試験科目となったこともあり、同じ十三年、諸国に国分寺と国分尼寺が建てられ、金光明四天王護国寺には『金光明最勝王經』を、法華滅罪寺には『法華經』を讀誦せしめたりしています。また、聖武天皇の光明皇后が総国分尼寺を建て、『法華經』を読ましめ、天正二十一年 (AD. 749) には、『法華經』一千部を書写して先帝の冥福を祈ったのが「千部会」の初まりとされます。その後、孝謙天皇は法華寺で比丘尼となり、法名を「法基」と名乗って佛舍利の供養をしたことなどが伝わっています。<sup>(2)</sup>

かように、奈良朝にあつて、すでに『法華經』が盛んに用いられ、またこのお経が女人・女性とも因縁が深かったことがうかがわれるのですが、これが平安時代となるや、上代随一の戦闘的思想家・伝教大師最澄が出でて、「日本天台宗」を創唱するにいたります。これが『法華經』を中心とする宗派であることは、その宗名が別名「天台法華宗」と言われることによつてもわかるでしょう。のち、鎌倉時代となつて、曹洞禅宗の承陽大師道元も『法華經』を重用しましたが、例の立正大師日蓮が、この法華の行者として生命がけで広宣流布に挺身したことは申すまでもありません。今日も、法華經信徒たちの唱える「南無妙法蓮華經」の、いわゆる御題目の声は盛んで、經の王者・「經王」として、天台宗・日蓮宗はもちろん・戦後派生した日蓮宗系新興佛教々団は、みなこの『法華經』を所依の經典としてお

りますし、さきに申しましたように、他の諸宗派もこのお経を尊重しているのです。

従って、今日では諸種の訳本が出版されて、現代文で読むことができるようになりました。ストーリーのバラエティ、興味豊かな七つの譬話、奇想天外な物語、それに永遠の生命が説かれ、真理への献身が唱道され、謙虚さが奨励されるなど、キリスト教徒にとっても興味をひくところ少なくないでしょう。賀川豊彦は、『法華経』を一読して『ヨハネ福音書』に比し、『ヨハネ伝福音書』の東洋流の註釈書と解して少しも差支へない」と語り、「私がイエスの福音を知らなければ、必ず法華の実行に努力してゐたらう。そしてその法華の実行をしてゐる中に、イエスを発見したなら必ずイエスに随って行つたらう。私は『法華経』を読んで、更に『ヨハネ福音書』をより深く味ふ氣になった。兎に角東洋に『法華経』の与へられたことは善いことであつた」と述べておられます。

それと同時に、『法華経』は大乗佛教運動のスピリットが生んだ一大文学作品で、この点、「福音書のなかで最も文学的なもの」と称され、その文学的野心と成功とで群を抜く『ルカ福音書』にも比されるでしょう。もとより、全体を一貫する思想の力感とか崇高な品格、清楚な宗教美といった点では同日の談でないことは、誰しもが虚心に認めざるを得ないところでしょうが。

## (2) 法華経の内容

ところで、この『妙法蓮華経』は鳩摩羅什の漢訳本で二十八品(章)あります。その宣揚せんとするところは、『法華経』が大乗佛典の一であることからしてわかるように、へ万人はひとしく佛たりうろという思想です。従来の小乗が教えてきたように、人間を声聞・縁覚・菩薩の三種類に分別して、声聞の徒は縁覚の徒の域にいたりえず、縁覚の徒は声聞の徒と共に菩薩の境地にいたりえずとする現実的な三乗説・三つの乗り物説に対して、人間は三種類ではなくて、みな等しく一乗・一つの乗り物に乗るのであり、すべて佛菩薩たりうる。特に『法華経』の精神を体得する

ことにおいて、従来の三乗の教えは実は一乗に導くための方便・手段であったとして、回小向大（小乗を回らせて大乘に向かひしめる）・開三顯一（三乗説を打開して一乗の真理を顯わす）・会三歸一（三種類の人間という境界を解いて、みな会わしめ一に歸せしめる）を旨とします。佛陀に反逆した佛敵・提婆達多にも成佛をゆるし<sup>(5)</sup>、従来、罪障深く、一段劣った者として退けられていた女人、しかも畜生身の龍王の八才の童女も成佛せしめられるという<sup>(6)</sup>、悪人成佛・女人成佛が説かれるのです。『法華經』の人気の高まるのも理由なしとしません。慈悲の権化として尊崇される觀世音菩薩つまり觀音さまも、この『法華經』の觀世音菩薩普門品第二十五に説かれるところです。

なお、全二十八品は序品第一から安樂行品第十四までと、從地涌出品第十五から普賢菩薩勸發品第十八までとに分され、前半は「迹門」と呼ばれるごとく、受肉して世に現われた理想の人間としての佛を語り、その教えの中心は佛の智慧。後半は「本門」と呼ばれるごとく、迹佛に対する本佛、すなわち宇宙的真理としての絶対佛たる本佛を語り、その教えの中心は佛の慈悲と言われます<sup>(7)</sup>。

## 第二章 《長者窮子》の譬喩

### (1) 「信解品」の解題

ところで、この『法華經』の信解品第四に、問題の「長者窮子」の譬喩が語られているのです。品名の「信解」とは、信じて解したところという意味なのですが、これは、実はすぐ前の「譬喩品第三」において、佛陀が有名な「三車火宅」<sup>(8)</sup>の譬喩によつて、従来の三乗の教えは方便なのであつて、実はみな同一佛乗なのである。つまり、へ人は誰でも佛たりうるゝとの真理を語り明かされるのを聞いた須菩提・大迦旃延・大迦葉・大目犍連の四大佛弟子・四大長老たちは、あまりの有難さに恐懼感激して、その信し解したところを、「たとえて言えば、こうでございますね」と言

って、語り出したところなので、「信解品」と呼ばれるわけです。そして、さきの「三車火宅」の佛陀の譬話が『法華經』中第一の譬話であって、今ここに四大弟子が語り出す「長者窮子」の譬話は第二の譬話となります。

## (2) 《長者窮子》の内容

さて、問題の「長者窮子」の譬話なのですが、長者つまり大富豪・大資産家の子が幼い時に父を棄て、家出をして五十年。貧窮の中に放浪しつつ、父の家にまぎれこみ、晴れて親子として再会をはたすという、めでたいストーリーの譬話です。それがキリスト教の『新約聖書』にある『ルカ福音書』第十五章の「放蕩息子」の譬話に非常によく似ているので注目されるのです。では、この「長者窮子」を岩本 裕氏によるサンスクリット語原典からの現代語訳で紹介して見ましょう。

あるひとりの男が父の膝下を離れたとします。この男は父の膝下を離れて、他国へ行ったとします。彼は其処に、二十年・三十年・四十年あるいは五十年と長い年月の間、住むとします。さて、この男が大人となりましたが、貧乏で、生業を求めながら衣食のために十方を放浪し、他国へ行ったとします。そして、彼の父も他国に移住し、多くの財宝・穀物・黄金・貯藏品・倉庫を所有し、しかも数多の金・銀・宝珠・真珠・琉璃・螺貝・水晶・珊瑚などを所持し、また大勢の奴婢・下僕・雇傭人がおり、また象・馬・牛・羊を幾頭も所持するようになります。また、多勢の従者をつれ、諸大国の中でも有数な金持となり、そして蓄積・利殖・農耕・商売によって繁栄したとします。

貧乏な男は衣食を求めるために、村落・町・市街地・地方・王国・首都などを流浪し、ついに彼の父で多くの財宝・黄金・金貨・貯藏品・倉庫を所有する人の住む、その都城に到達したとします。貧乏人の父親なる人は多くの財宝・黄金・貯藏品・倉庫を所有して、この都城に住み、五十年の間、行方不明となった息子のことをいつも思っ

ているとします。彼は息子のことを心の中で思っではいても、誰にも打明けず、自分ひとりで心の中で悩み苦しみ、このように考えるでしょう。

『自分は年をとり老いてしまったが、自分には莫大な黄金・金貨・財宝・穀物・貯蔵品・倉庫がある。しかも、一子もない。何ということだ。自分の生命が終わる時が来れば、この一切を相続するものもなく、散失してしまうであらう。』

彼はいくども息子のことを思い、『ああ、わたしのあの息子が、この財産の蓄積を相続してくれるなら、わたしは何の苦勞もないだろうに。』と嘆きつづけるとします。

かの貧乏な男は衣食を求めながら、遂に、莫大な黄金・金貨・財宝・穀物・貯蔵品・倉庫を所有する富裕な人の家に近づくとします。かの貧乏な男の父は自宅の玄関前に幔幕を張り、地面にはむしろを敷きちらし、大勢の婆羅門・刹帝利・商主などの取巻きの連中に囲まれ、崇め奉られ、足台があつて金銀をちりばめ宝玉の華鬘をかけた豪華な椅子に傲然と腰をかけて、大きな扇で煽がせながら、幾千万・幾十万の黄金で取引をしているとします。かの貧乏な男は、自宅の玄関のところで傲然と椅子にかけ、大勢の人々に取巻かれて取引をしている自分の父を見ました。そして、再度見て、怖れおののき、驚きあわて、全身の毛がよだち、心乱れて、このように考えました。『突然に、王が大臣に出会ってしまった。ここには、われわれの為すべき仕事は何もない。立去ろう。貧民窟へ行けば、われわれの衣食は余り苦勞しないで得られよう。長いこと愚図愚図するのは真平だ。ここにおれば、それこそ捕えられて、強制労働をさせられるか、あるいは他の災難がふりかかるであらう。』

この貧乏な男は苦難が相次いで起こると考え、その恐怖に怖れおののき、急いで立去り、逃げて、そこに留ろうとしないでしょう。ところが、かの金持の男は自宅の玄関前で豪華な椅子に腰をかけていましたが、貧乏な男をひと目見るなり自分の息子であることに気がつきました。そして、再び見て悦び満足し、うきうきと心はずませ踊らせ、嬉しさのあまり上機嫌となつて考えましょう。

『これは実に不思議だ。ともかく、この莫大な黄金・金貨・財宝・穀物・貯蔵品・倉庫を相続する者ができた。そ

れに、わたしはあの子のことを幾たびとなく考えているのだ。あの子は自分からここへやって来た。それに、自分は年をとり、老いさらばえた老人だ。』

さて、息子に対する激しい愛情に苦しんでいました。この人は、すぐさま急いで使いの者を走らせるでしょう。『おまえたちは急いで行つて、あの男を連れてこい。』従者たちはみな走つていき、かの貧乏な男を捕ましよう。かの貧乏な男はそのとき怖れおののき、身の毛をよだたせ、心を乱して、激しく恐怖の声をあげて叫びつづけましよう。『あなたがたに、わたくしは何も無礼なことをいたしません。』と言いましよう。しかし、従者たちは、わめき叫ぶ貧乏な男を無理矢理に引きずつて来るでしょう。そこで、かの貧乏な男は怖れおののき、慌てふためき、心乱れて考えましよう。『いずれにせよ、自分は処刑されるか、刑罰をうけて死ぬのだ。』と。彼は失神して、地上に倒れましよう。彼の父は事情を察し、彼の傍に近づきましよう。そして、自分の従者たちに、このように言いましよう。『おまえたちは、この男をどのように手荒に連れて来るのではない。』と言ひ、彼に冷たい水をかけてやり、それ以上は何も語らないでしよう。それは何のためでありましようか。かの長者は、かの貧乏な男が卑賤な境遇に満足しておることを知り、そして自分が栄華の境遇にいることを弁えていますし、その男が自分の息子であることを知っているからであります。

さて、かの長者は巧みに彼が自分の子であることを全然明かさないでしよう。かの長者は別の従者に命じましよう。『おい、下男よ、おまえは行つて、あの貧乏な男に、このように言え。』おい、貧乏者よ、おまえは好きなどころへ行け。おまえは自由なんだ。』とな。』このように言われて、かの下男は長者の言葉に従ひ、かの貧乏な男に近づき、このように言いましよう。『おい、貧乏者よ、おまえの好きなどころへ行け。おまえは自由なんだ。』と。すると、この貧乏な男はこの言葉を聴いて、驚き、不思議に思うでしよう。彼は立上つて、その場処から立去り、貧民窟に衣食を求めるために行きましよう。そこで、かの長者はかの貧乏な男を惹きつけるために巧妙な手段を用ひるでしよう。長者は顔色の悪い貧相な二人の男を雇ひ、『おまえたちは、ここに來ていた男のところへ行き、かの若者をおまえたち自身の名で二倍の日給を払つて雇ひ、この俺の家で仕事をさせろ。あの男がもし「何の仕事をする



のか。」と言ったなら、「俺たちと一緒に汚物の掃除をするんだ。」と、かの若者に言うんだ。」と言いましよう。そこで、この二人とかの貧乏な男とはこの大富豪から手当て貰って、その家で汚物の掃除をすることになりました。そして、この大富豪の家の近くにある藁葺きの小屋に住みましよう。そして、かの金持は窓から自分の息子が汚物の掃除をするのを見ましよう。そして、その姿を見て、再び不思議に思うでしよう。

かの長者は自分の邸宅から下りて、冠や装飾品を取りさり、また着ていました柔かくてゆつたりとした華美な衣服を脱ぎ、汚れた衣服をまとい、右手に籠を持ち、自分の手足を泥土でよごし、遠くから言葉をかけながら、かの貧乏な男に近づいて話しかけるとします。『おまえは籠を持つて行け。ほんやり立っていないで、泥を取除け。』このような手段で、長者は子供に話しかけ、お喋りをし、そして言いましよう。『おい、下男よ、おまえはここで仕事をせよ。二度と他処へ行くではない。わたしはおまえに特別の給金をやろう。おまえの欲しいものがあるなら、何でも遠慮なく呉れと言うがよい。水瓶の代金であれ、壺の代金であれ、釜の代金であれ、薪代であれ、塩代であれ、食物であれ、衣服であれ、何でも呉れと言うがよい。おい、下男よ、わたしに古びた上衣がある。おまえがそれを欲しがるのなら、それをおまえにあげよう。おい、下男よ、おまえがこのようなものが欲しいなら、わたしは何でもおまえにあげよう。おい、下男よ、安心せよ。わたしをおまえの父親と思うがいい。それは何故かと言え、わたしは老齢だし、おまえは若い。それに、おまえは汚物の掃除をして、わたしに色々と尽してくれた。その上、おい、下男よ、おまえはここで仕事をしていて、悪意も不正も、不誠実なことも、傲慢さも、また猫被りも、曾てしたことがないし、またしないであろう。おい、下男よ、いつでもおまえには、他の下男たちが仕事をしているときに見られるような欠点は、何一つ見られない。おまえは今日から以後、わたしにとっては実子と同じだ。』さて、かの長者はこの貧乏な男に息子という名を与えましよう。そして、この貧乏な男も、かの長者に対して父の印象をもつようになりましよう。このような手段で、息子に対する愛情にかつていました長者は、この息子に二十年の間も汚物の掃除をさせましよう。こうして、二十年を経ますと、かの貧乏な男は長者の家に遠慮なく出入するようになりますが、依然として藁葺きの小屋に住んでいましよう。

かの長者は衰弱してきまして、自分の死期の近づいたことを覚るとします。彼はこの貧乏な男にこのように言いました。『おい、下男よ、こちらへおいで、ここにわたしの莫大な黄金・金貨・財宝・貯蔵品・倉庫があるが、わたしは重病である。わたしは、これを与うべき人、受取るべき人、そして委ねるべき人をもとめている。おまえはこのすべてを受取ってもらいたい。それは何故かと言えば、わたしはこの財産の所有主だが、おまえもそうなつてほしい。そして、わたしの財産を、おまえは全然浪費しないようにしてもらいたい。』

かの貧乏な男はこのようにして、かの長者の莫大な黄金・金貨・財宝・貯蔵品・倉庫を受取るでありました。しかも、自分はそれに関心をもち、またその中からなにつ貰わず、ひきわり麦の一プラスタの値段さえも貰わないでしよう。そして、自分は以前と同じように貧乏だと考えて、以前の通り藁葺きの小屋に住んでいました。

かの長者は息子が有能で、財産をまもる人として抜目のないことを知り、また心が高潔であるために謙遜しており、しかも曾て貧乏であつたことを考えて心を痛め、<sup>は</sup>慚じ、自己嫌惡に陥つてゐることを察し、死期が近づくと、かの貧乏な男を呼び寄せ、大勢の親族の者たちに紹介し、王や大臣の前で町の人々や国の人々に向つて、このように宣言しました。『諸君、聴いていただきたい。これはわたしの実子で、わたしはこの子の生みの親である。<sup>な</sup>某と

いう都城があり、そこからこの子は五十年前に姿を消した。この子は某という名、またわたしは某という名である。そして、わたしはこの子を探して、その都城からここへやつて来た。これはわたしの息子で、わたしはその父親である。わたしに少しでも財産があるならば、そのすべてをこの男に贈る。また、わたしに少しでも特別な財貨があるとしても、そのすべてを、この男は承知している。』

さて、かの貧乏な男はそのときこのような言葉を聴いて、驚き、不思議に思い、このように考えるでありました。『突然に自分は、いずれにせよ、黄金・金貨・財宝・穀物・貯蔵品・倉庫を得た。』<sup>(9)</sup>と。

### 第三章 《放蕩息子》の譬喩

#### (1) 《放蕩息子》の内容

ところで、おなじみ『ルカ福音書』の「放蕩息子」の方も、〈新改訳〉であらためて読みくらべておきましょう。特に、さきの「長者窮子」の筋を頭にして比較しながら。

ある人に息子がふたりあった。弟が父に、『おとうさん。私に財産の分け前を下さい。』と言った。それで父は、身代しんたいをふたりに分けてやった。それから、幾日もたたぬうちに、弟は、何もかもまとめて遠い国に旅立った。そして、そこで放蕩して湯水のように財産を使ってしまった。何もかも使い果たしたあとで、その国に大きさんが起こり、彼は食べるにも困り始めた。それで、その国のある人のもとに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって、豚の世話させた。彼は豚の食べるいなか豆で腹を満たしたいほどであったが、だれひとり彼に与えようとはしなかった。しかし、我に返ったとき彼は、こう言った。『父のところには、パンのあり余っている雇い人が大ぜいいるではないか。それなのに、私はここで、飢え死にしそうだ。立つて、父のところに行つて、こう言おう。』「おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりしてください。』こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとに行つた。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄つて彼を抱き、口づけした。息子は言った。『おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。』ところが父親は、しもべたちに言った。『急いで一番良い着物を持つて来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。そして肥えた子牛を引いて来てはふりなさい。食べて祝おうではないか。この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。』そして彼

らは祝宴を始めた。……ヘルカ15・11〜24〜

(2) 成立年代の関連性

似ていると言えば、古代文献のうちでこれほど似ているものは他に見あたらないことでしょう。ここに、『法華経』と『ルカ福音書』との交渉、つまりいづれかが元の親で、いづれかがそれを借用ないし模倣した子ではないか、とも感じられるのですが、現在のところ確とは申せません。ちなみに、『ルカ福音書』は紀元一世紀(AD. 58〜65)、『法華経』は紀元一世紀〜三世紀(AD. 40〜220)間に成立したと言われ、そのうち「長者窮子」の譬喩は紀元一世紀に<sup>かえん</sup>布衍されたと言われています。つまり、「長者窮子」も「放蕩息子」も同時代の成立で、これを時間的先後関係から、いづれが本家で、いづれが分家か、といった本末関係を考証することは、まず断念しなければならぬでしょう。そこで、両者の比較照合は、もっぱら内容の点にしばらく留められて来るわけなのですが、これをよくよく考究してゆくと、世<sup>よ</sup>上で言われる類似点よりも、相違点の方が全体的に浮かび出てきて、ほかならぬ佛基兩教の特性といったものが忽然<sup>こゝろ</sup>とあらわれてくるのに一驚せざるをえなくなるのです。

第四章 《長者窮子》の教説

(1) 佛教々理的解析

ところで、佛教学者は、この「長者窮子」譚<sup>なん</sup>の寓意中に秘められている佛教々理の大要を次のように解析いたします。

(一) 窮子が父を捨てて他国に放浪すること五十年とは、過去の大昔、かつて佛に従って法華大乘の修行志願を起した衆生が、いつかこれを忘れて五道の迷界に沈淪したことを譬えたものである。

(二) 一方、父が再会の日を待って一城市にとどまったとは、佛が再び衆生を憶つて、この三界に應生、つまりキリスト教風に言うところと受肉されたことを意味する。

(三) 窮子が父の住む城市にやって来たとは、佛が應現された同じ娑婆世界に生まれ会えたことを言う。

(四) 窮子が貧里・貧民窟へ埋もれて、その日その日の糊口をしのいでいたとは、外道の教えに迷って浮身をやす有様を描いたもの。

(五) 父なる長者が門辺に立つ窮子の姿を見て、これを捕えんと傍らの人を急ぎつかわしたところ、窮子が恐怖して失神してしまったとは、佛が真理をありのままズバリと『華嚴經』で説いたところが、衆生には理解しがたく驚倒したことを物語っている。

(六) そこで父(実は佛)は方便を設けて、貧相な二人の者をつかわし、除糞賤業の傭賃をもって長者邸に連れて来たとは、大衆向きの小乗方便の『阿含經』を説き、四諦、十二因縁の法を以て煩惱の糞穢を断除して三界の繫練を脱することに譬えたものである。

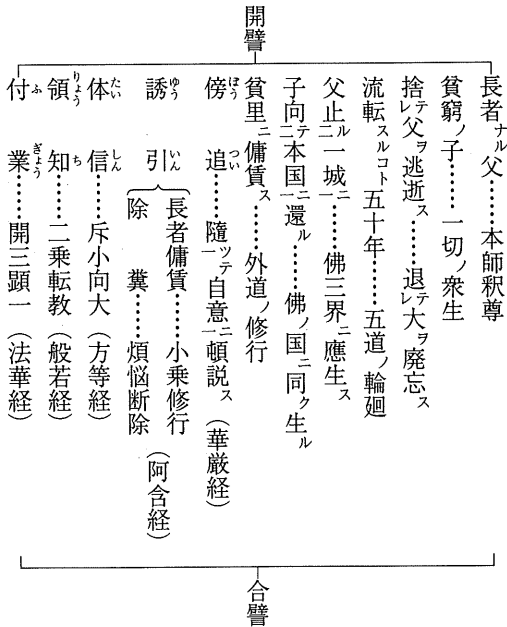
(七) こうして長者は窮子に次第に接近することができ、相互に体信したとは、佛が小乗羅漢の徒をして回小向大して、大乘に近づかせるために、『維摩經』・『勝鬘經』等の『方等經』を説いたもの。方等とは方正な中道の道理・佛陀と衆生とは平等なりの意で、衆生が自然に小乗を斥けて大乘を慕うようにしむけんとするものの義です。

(八) 次に窮子が長者から財産の出納をまかせられたとは、佛が『般若經』をもつて、畢竟空の道理を説いて諸法実相を示した段階であるけれども、窮子が出納一切を扱うものを他人の物と思っていたように、畢竟空も、まだ自分のものとは思っていない状態を言う。

(九) 最後に長者が臨終の病床に国王、大臣、親戚、知人を呼び、初めて親子の名乗りをあげ、窮子に財産全部を譲与して、その本心を明かしたとは、佛がこの『法華經』と、つづいて説かれた『涅槃經』において、三乗方便の

秘密を開いて、真実一乗の真意を明白にした、いわゆる開三頭一の説法を言うのである。

以上、中国の天台大師智顗 (A.D. 538~597) が諸經典とその教説を統一体系化しようとして建てた、いわゆる「五時八教」の教判のうち、「五時」が、(1)華嚴時、(2)阿含時(鹿苑時)、(3)方等時、(4)般若時、(5)法華・涅槃時という風に、法華經を万善同歸經、綜合統一經とすることによって、佛陀教説を五段階に分類して、教理の進展を指差しつつ組織化した次第なのです。キリスト教で言えば、啓示の歴史的展開、デイスペンセイションの進展ということになります。今、これを漢訳用語で図示すると次のようになります。



(2) 一般的説法

教理的解析は以上の如くなされますが、これを、一般の法座では、ぐつとくだいて、たとえば次のように説法することになります。

大長者（佛）が父であることも知らず、そのふところから逃げ出して、人生の苦しみの中をさすらい歩いている窮子は、むろん世の衆生の姿です。

しかし、親子の血は争われないもので、自分が佛性をもっていることは露知らず、苦界をさすらい歩いてはいても、いつしか佛のおられるところへ近づいてゆく。「ひとりでに近づいてゆく」というところに、言うに言われぬ尊さがあります。

また、衆生は佛の門の前に立っていないながら、佛が自分の父であるとは知らない。けれども、佛の方はあれがわが子だと知っていると言うことも意味深い。

佛は衆生を悟り（真理）へ引き入れようとされるのだが、衆生の心にとっては、その教えの程度があまり高いので、とてもとても自分ふぜいの近寄れるものではないという卑屈な考えから、かえって背を向けて去ってしまうのです。

そこで、佛は方便を使って、衆生と同じような姿をしているが、それより少しはましな二人の人間（佛のお屋敷の下働きで、とにかく心の安定を得ているもの、すなわち声聞と縁覚）を使いに出して、こんな人となら仲間となれようという心を起こさせました。

そして、「糞を除く」仕事をさせられたというのは、小乗の修行によって煩惱を除くようにと導かれたわけです。こうして次第に佛の教えに親しませてから、おまえを私の子にしようと言って、佛の本当の教えへ引き上げてやろうとされるのですが、子どもの方は矢張り、自分とは関係のない段ちがいの教えだと思いこみ、佛との間に一線

を引いてしまっている。それで、二十年あまりも小乗の教えをコツコツと行じつづけたわけです。もちろん、二十年もの長い間「糞を除して」いたというのは、えらいことで、ともかく、こうしてようやく心の自由自在を得、佛の教えにも広く通ずるようになってきます。

そこで、佛は自分の教えの蔵を開けつ放しにして、さあおまえのしたいようにしなさい、と言われた。自分が実子なのですから、取りたいものがあつたら、いくらでもとつていいという謎なのですが、まだまだ自分は使用人だと思つてゐる。卑屈な精神が抜けきらない。

だから支配人（佛の弟子）としては、まちがいのない勤めぶり（佛の代わりに説法などをしてゐるに立派であつた）なのですけれど、その財宝がみんな自分のものであることなど知らうともしないのです。やつぱり二乗根性が抜けきらないで、これで十分だと思つていたのです。

しかし、いよいよ佛が入滅される直前に、『法華經』を説かれて、「佛と衆生とは親子であるぞ、一切衆生が佛になれるのだぞ」という大宣言をされるに及んで、始めて、「ああ、そうだったのか」と驚き、かつ思いもしなかつた財宝（佛の悟り）が確實に自分のものになるのだということがわかつて、大歡喜したわけです。

かくの如く、声聞の長い修行の過程をじつと見守り、次第に引き上げた佛の慈悲と方便力の姿を見よや見よ。しかるに、なんと、われわれは幸いにも最初から『法華經』に会うことができた。まわり道をせずとも、ただちに佛にあふところへ飛びこむことができる。

そのためには、この信解品の中に語られているように、「卑屈な精神をなげうつ」こと、「自分などはとても駄目だ」として、自分の佛性を否定しないこと。「自分も佛になれるのだ」、「自分はこの宇宙と一体なのだ」と、のびのびと自分に言いかけせることである。

「自分は佛の子である。だから宇宙の相続者である。宇宙そのものが自分である。だから、宇宙は自分の思うとおりになるのだ」という自信に生きよ！<sup>(12)</sup>と。



以上のような説法が終わると、「南無妙法蓮華經」のお題目の大合唱となるわけです。

## 第五章 《長者窮子》と《放蕩息子》

### (1) 両譬喩の対照

さて、ここに「長者窮子」と「放蕩息子」との対照表をつくってみると、左のようになります。なお、法華經の引用文は昔馴染の漢訳にしてみました。

#### 法華經

##### 《長者窮子》

息子（独子？）しゅっほん 出奔。

幼児より他国に流浪五十年。

父は商人。

父の悩みは財産相続。

「老朽し、多く財物ありて、金・銀・珍宝は倉庫に

#### ルカ福音書

##### 《放蕩息子》

息子（次男） 出奔。

財産、分受のち遠国に。

父は農人。

父の悩みは、ただ息子の帰来。

盈<sup>み</sup>ち溢れたるも、子息有ることなし。一旦に終没<sup>じようもつ</sup>すれば、財物は散失して、委ねまかす所無からん。こ  
こをもつて、慇懃<sup>ねんころ</sup>に毎にその子を憶う」。

「われ、若し子を得て、財物を委ねまかせば、やす  
らかに、こころよくして、また憂慮すること無から  
ん」。

再会は偶然。

父も他国に移住して、子はたまたま到<sup>いた</sup>る。

父は息子と認め、相続者の出現を喜ぶ。

「わが財物・庫蔵は、今、あたえる所あり。われ常  
にこの子を思念すれども、これを見るに由なし。し  
かるに忽ちにして、自ら来る。甚<sup>はな</sup>だわが願いに適<sup>かな</sup>え  
り。われ、年おとろえたりと雖も、なお、貧惜<sup>とんじやく</sup>す」  
と。

子は父を知らず。

父、傍人<sup>ほうじん</sup>を遣<sup>つか</sup>わして連れ来らしむ。

息子、恐怖して悶絶す。

再会は必然。

父は定着して待ち、子は家郷を目ざして帰る。

父まず息子を見つけて、あわれむ。

「まだ家までは遠かつたのに、父親は彼を見つけ、  
かわいそうに思い」。

父、みずから走り寄り、抱き、口づけする。

息子、くだんの言いわけを述べる。

「使者は疾く走りて捉<sup>とら</sup>うるに、窮子は驚愕して、怨<sup>あだ</sup>なりと称して、大いに喚<sup>きけ</sup>べり『われは相犯さず。何のために、捉えらるるや』と。使者はこれを執<sup>とら</sup>えること、いよいよ急にして、強<sup>し</sup>いてひきいて還る。時に窮子はみずから念<sup>おも</sup>う『罪無くして、しかも囚<sup>とら</sup>えらる。これは必定して死せん』と。うたた更におそれ、もたえて地に甃<sup>たお</sup>る」。

父、父子の間柄を明かさず。

息子を釈放。

息子は貧里に赴く。

父、二人の下男を遣わして、除糞作業に備う。

父みずから除糞作業に入って子に近づく。「子の如くにせん」とも語る。

「われは汝の父の如し……今より已<sup>い</sup>後<sup>ご</sup>、生む所の子の如くにせん」。

「長者は更に、ために字<sup>な</sup>を作り、これを名づけて児となせり」。

「息子は言った。『おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりになってください。』」

父、息子を大歓迎。

「ところが父親は、しもべたちに言った。『急<sup>いそ</sup>いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。そして肥えた牛を引いて来てはふりなさい。食べて祝おうではないか。この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。』そして彼らは祝宴を始めた」。

父、老衰して、息子に財宝を領知せしむ。

父、終りに臨んで、父子の間柄を明かす。

「これ実に、わが子なり。われは、実にその父なり、  
今、わが有する所の財物は、皆、これ、子の有なり。  
先に<sup>すいぶん</sup>出内する所は、これ、子の知る所なり」

息子の歓喜。

「窮<sup>きう</sup>子は、父のこの言を聞いて、即ち大いに歓喜し、  
未曾<sup>みそ</sup>有<sup>ゆう</sup>なることを得て、この念<sup>ねん</sup>を作<sup>な</sup>せり『われは本<sup>ほん</sup>、  
心に<sup>ねが</sup>怖<sup>おそ</sup>い求むる所あることなかりしに、今、この宝  
藏<sup>じゆん</sup>は自然<sup>じねん</sup>にして至れり』と」。

兄の不平。

父のメッセージ。

(2) 両譬喩の特性

さて、この筋立てを文学作法上から対比してあらわしてみますと、次のようになりましょうか。

「長者窮子」

「放蕩息子」

全体的に言って

哲理的

感動的

心情において

抑制的

本然的

筋はこびにおいて

技巧的

直截的

意味合いにおいて

教訓的

現実的

このほか、「長者窮子」の方は、父が金融経済的社会を背景にしているのに対して、「放蕩息子」の方は、農耕経済的社会を背景にしていることもあげられましょう。

すなわち、窮子の父・長者は、「出入に利を息むこと、すなわち他国に遍く、商估・賈客もまた、はなはだ衆多なり」とされ、臨終にあたっては、「終らんと欲する時に臨み、その子に命じて、ならびに親族・国王・大臣・刹利・居士を会むるに、皆、悉くすでに集まれり」という、国王・大臣をも招致しうる大資本家・大豪商像は、貨幣経済の進展した時代の産物で、この点から法華経成立年代の上限が、インド貨幣経済の急激に発展したウエーマ・カドフィセス王（*Uśaiśa*）以後）の時代以後のこととして、紀元四〇年とされるゆえんであり、その下限は、西北インド及びヒンドウスタン地方のストウーパ（佛塔）建造が急激に減退したヴァースデーヴァ王の治世二〇二―二二九年を下限として、『法華経』嘱累品第二十二までの部分は、四〇―二二〇年の間に成立したものとされるのです<sup>(13)</sup>。

これに対して、「放蕩息子」の方は、息子が遠国で「大きな」にあい、「畑」で「豚」の世話をし、「豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいほどであった」とあり、御馳走には「肥えたる牛を引いて来てはふる」のであり、兄は「畑」

にいたと描かれ、かつ蕩児が遠い所で蕩尽したとあるのも、彼の生家が都も遠い農村地帯であることをうかがわせます。それに、畑から帰った兄息子には、「長年の間、私はおとうさんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下さったことがあります。それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来た子のためには、肥えた子牛をほふらせなされたのですか」と、不満を述べていますが、弟が遊女におぼれたというとき、都塵を遠きに思っているように見えます。

以上のような背景の相違などを視野におさめてみると、両者間には必ずしも本末関係があつたとする必要もなく、別々、独立に成立したとされることもありうるわけです。蕩児の帰来譚は、東でも西でも、いつでもあつたことなのですから。M・ウインテルニッツは両者は全く異なつた傾向を有しており、関係を信ずることができないとしています<sup>(14)</sup>。

## 第六章 財産相続と父子邂逅

### (1) 財物と「出会い」

さて、ここいらへんで、次第に浮かび上ってくるのは、『法華経』と『ルカ福音書』との眼目・精神の相違です。背景社会の異なることも一因となつてか、『法華経』の父の苦惱は、もっぱら付財<sup>ふざい</sup>つまり財産相続に集注しています。

今一度、あらためて見ますと、父が常に子を念うのも、「老朽し、多くの財物ありて、金・銀・珍宝は倉庫に盈ち溢れたるも、子息有ることなし。一旦に終没<sup>しじもつ</sup>すれば、財物は散失して、委ねまかす所無からん。ここをもつて、慇懃<sup>けんけん</sup>に毎にその子を憶う」とされ、「われもし子を得て、財物を委ねまかせば、坦然<sup>やすらか</sup>に、快樂<sup>こころよく</sup>して、また憂慮すること無からん」と念うがゆえなのです。

ですから、獅子座において、子を認めるや、「わが財物・庫蔵は、今あたえる所あり。われ常にこの子を思念すれども、これを見るに由なし。しかるに忽ちにして、自ら来る。甚だわが願ひに適えり。われ、年朽えたりと雖も、なお貧惜す」として、何よりも財物相続の安堵をもらしますし、のち、ようやく長者宅につかえて落ちついた窮子に対しても、父は「われ、今、多く金・銀・珍宝を有して、倉庫に溢ち溢れたり。その中の多少と取り与うべき所とは、汝、悉くこれを知れり。わが心には、かくの如く。当にこの意を体るべし。所以はいかん。今、われと汝とは、すなわちこれ異ならざるなり。宜しく用心を加えて、漏失せしむることなかるべし」とあつて、やはり関心は財物に集められています。それに、窮子が金・銀・珍宝および諸々の庫蔵を領知しながら、「しかも、一餐も怖い取るの意無し」であつたと特記されているのも、あまりと言えばあまりな財物中心の視角です。そして、臨終を迎えた父は、「これ実に、わが子なり。われは、実にその父なり。今、わが有する所の一切の財物は、皆、これ、子の有なり。先に出内する所は、これ、子の知る所なり」と宣言し、これを聞いた息子があげた歓喜も、自分が実は長者の子であり、長者が自分の父であつたという親子としての喜びではなく、「われは本、心に怖い求むる所あることなかりしに、今、この宝蔵は自然にして至れり」として、財宝を相続・取得した喜びに集注しているではありませんか。これが『法華経』の「長者窮子」譚の、誰しもが認めざるをえない性格・特色なのです。

これに対して、『ルカ福音書』の方は、なるほど冒頭において放蕩息子が父の身代を先取りしたとは言え、父の念願するところは、ただ一途に息子の上であり、再会であつたと言えます。彼と此れとの相違は歴然たるものがあります。『法華経』が財物に関心を集注することをもって、いささか商人的世俗臭・守銭奴銅臭を感じしめることは否めないことです。とは言え、その言う所の財宝とは、実は大乘の真理、『法華経』が力説せんとする一乘真実の真理をあらわし、万人はみな佛性を有す、佛たりうる、人として佛たりえぬ者はなし、という哲理であり、言うところの財物の相続とは、聖徳太子が『法華経義疏』において、

「多ク有<sup>二</sup>リテ<sup>一</sup>財物」金銀珍宝、<sup>ハ</sup>倉庫ニ盈<sup>チ</sup>溢<sup>ル</sup>」と者<sup>ハ</sup>、大乘教の明<sup>アカ</sup>す所の佛果の衆徳に譬へ、「無<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>ルコト<sup>一</sup>子息」<sup>ハ</sup>と者<sup>ハ</sup>、大乘を受くるに堪ふる衆生の無きを云ふ<sup>(15)</sup>。

と釈しているように、大乘の真理の相承であると解釈すれば、最上であり、これはまた佛教的です。すなわち、真理、真実の哲理として立つ佛教の本質をよく物語っていると申せましょう。

それに対するに、『ルカ福音書』の方には、銭臭・銅臭の全くないことは<sup>(16)</sup>、あまりにも明らかところで、その中心問題は、「財宝」、はたまた「真理」と言うにあらず、子が父のふところに帰る、父が子をかき抱く、父子再会、神人邂逅、人格と人格とのジカの触れ合いに凝縮、燃焼していることは、佛教がすぐれて「哲理的」・「哲学的」であるのに対して、キリスト教が人格神より発する人格対人格の宗教であるゆえんを浮き立たせているものと思われてなりません。これをしも、『法華經』によつて代表される佛教の「理」に対するに、『ルカ福音書』によつて代表されるキリスト教の「愛」を感じざるをえないところです。

これをたとえば、親子誘引―父がその子をやがもとに引き寄せようとする態度・手段にしても、『法華經』の長者は、まず使者をして傍<sup>ほう</sup>追<sup>つい</sup>せしめる。恐怖して悶<sup>もん</sup>絶した息子の有様を見るや、今度も二人の貧使を遣わして除糞作業に誘引し、次いでみずからも身をやつして体信につとめ、やがて、その財産を領知せしめるといった、いわゆる「斥小<sup>せきせう</sup>向大<sup>きやうだい</sup>」の訓導をへて、ついに父子宣言・財産相続を果たすと言った、慎重次第の理に勝り、きわめて教訓的・哲理的色彩が強く、なんと二十年間の長きあいだ同居しながら、親子の名乗りをあげなかった<sup>(17)</sup>というところなどは、現実には有りうべからざること、実存的な生身の人間不在とさえ言うべく、少なくとも人間自然の感情を度外視しても、きわめて理詰めで行くのに対して、『ルカ福音書』の父は、正に人間本来の感情を發露して、理屈臭は棄にしたくもないのです。まだ遠く離れていたのに、老いの目に片時も忘れえざりし息子をみとめた老父は、あの「長者」のよう「傍人」・「下僕」をさし向けるのではなくして、我れとみずから、あわれにも老軀をひっさげて駆け寄り、もう金輪際はなすまいぞと、その垢<sup>あか</sup>だらけの首根っこをかき抱くのです。愛の爆發です。そこには手だても、説法もあり



ません。

そのふところの中で、息子<sup>が</sup>、「おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません……」云々と、猪小才<sup>ちよこさい</sup>な言いわけをしやべるのを全部言わせず、その口を、おのがふところに押しつけて黙らせ、その頭上に、「急いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。そして肥えた子牛も引いて来てはふりなさい。食べて祝おうではないか。この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから」と、歓喜の大声を轟<sup>とどろ</sup>かせるのです。正に理も法も吹きとんだ、怒濤のような愛で、これこそ『聖書』の真骨頂<sup>しんこつちゆう</sup>であつたではありませんか。愛―嵐のような愛、愛が一切の理法を越え、圧倒し、制圧するのです。

とかく、一般にはキリスト教は理に勝つと思われ、むつかしい理論的な宗教と感じられています。しかし、真実、『旧新約聖書』六十六巻<sup>が</sup>語るのは生身<sup>なまみ</sup>の純真な宗教ではなかつたのでしょうか。「神学」という作業が、この熱き生命を解剖台上に擬<sup>な</sup>して、腑分け<sup>ふわけ</sup>の説明となると、正にファウストの言う「なくもがなの神学」となるのであり、無味乾燥、霊的熱情皆無な才子的神学者らによって、いかにキリストが銜学的<sup>げんがく</sup>な粉黛<sup>ふんたい</sup>をほどこされて枯渇してきたことかと恐れます。

佛陀には「観照の哲理」ありとすれば、キリストには「感動の宗教」があります<sup>(18)</sup>。今日、いわゆる民俗学者たちは、キリスト教を砂漠的宗教と色分けして、モンスーン地帯の諸宗教と対比させ、男性的・父性的であり、峻厳、隔絶、緊張、戦闘的、意志的、閉鎖的、超現世的、非感情移入抽象的で、合理主義的、洞穴的である。つまり乾燥・非情なものと言った印象批判を唱えています<sup>(19)</sup>が、この「放蕩息子」に高鳴り響き渡っているのは、男性・父性的というよりも、むしろ女性的・母性的とも言うべき愛であり、隔絶・閉鎖的と言うよりも、寛恕・抱擁的であり、冷酷・意志的と言うよりも、感情移入的であり、合理主義的と言うよりも、むしろ非合理的であるとさえ申せましょう。

(2) 兄の不平・天の父

しかも、父子対面までの筋書において、「放蕩息子」が、「長者窮子」にくらべて、単純・非技巧的であることは、すでに見たところですが、しからば、「放蕩息子」は文学技巧において、「長者窮子」に劣ると言えましようか。すでに単純なるものが複雑なものに劣るとなしえないことは論外として、「放蕩息子」の譬話は、正にその父子対面までは、しかく呆気ないほど単純であり、それが特色であつたとしても、譬話そのものは、実は父子対面をもつて終わっているのではないのです。実はそのあとに端倪すべからざる、もう一場面が用意され、展開されるのです。すなわち、不平家の兄を登場させて、二枚腰の逆転、意外な止どめの、息を呑むような技巧がひらめくのです。

ところで、兄息子は畑にいたが、帰りかけて家に近づくと、音楽や踊りの音が聞こえて来た。それで、しもべのひとりと呼んで、これはいったい何事かと尋ねると、しもべは言つた。『弟さんがお帰りになつたのです。無事な姿をお迎えしたというので、おとうさんが、肥えた子牛をほふらせなさつたのです。』

すると、兄はおこつて、家にはいろいろとしなかつた。それで、父が出て来て、いろいろなだめてみた。しかし兄は父にこう言つた。『ご覧なさい。長年の間、私はおとうさんに仕え、戒めを破つたことは一度もありません。その私には、友だちと楽しめと言つて、子山羊一匹下さつたことがあります。それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰つて来た子のためには、肥えた子牛をほふらせなさつたのですか。』

父は彼に言つた。『おまえはいつも私といつしよにいる。私のものは、全部おまえのものだ。だが弟は、死んでいたのが生き返つて来たのだ。いなくなつていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。』

一触即発の火花で昇華するかと思われていた「放蕩息子」譚は、なんと長い顔の不平屋の兄の登場と言う冷気を感じしめる一幕を挿し入れ、しかもこの冷やかな暗雲を父が払いのけ、掴み捨てることによって、意外な衝迫をもつ

て結ばれるというところは、土壇場の急転回で、息子帰還の意義と父の喜びとを、重厚に沈澱、結晶せしめたドラマ・トゥルギーであり、理中の理であると言えましょう。

このほか、「長者窮子」には、神の世界、天への配慮は、文字面からも、意味面からも皆無であったのに対して、「放蕩息子」においては、放蕩息子自身、窮迫して、「父のところには、パンのあり余っている雇い人が大ぜいいるではないか。それなのに、私はここで、飢え死にしそうだ」と言った、<sup>①</sup>背に腹はかえられぬ<sup>②</sup>的な、低次な思いがあると共に、「立って、父のところに行つて、こう言おう。『おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました』」云々と、俄然<sup>がぜん</sup>、「天」に対する「罪」が思われたのであり、実際、息子は父の胸に抱かれながら、「父よ、われは天に対し、また汝の前に罪を犯したり。今より汝の子と称へらるるに相応<sup>ふさわ</sup>しからず」と、語り出して、二度も「天」と「罪」の文字がくりかえされるのです。いや、この言葉は「天の父よ、われは汝の前に罪を犯したり。今より汝の子と称へらるるに相応<sup>ふさわ</sup>しからず」と読みかえられましょう<sup>③</sup>。此れにあつて彼に無きものは、「天」であり、「神」であつたとすると、万々一、「ルカ福音書」が『法華經』から題材を借用したと假定しても、その改変・脚色において、その根本性格は有神論的に変質せしめられたと言うことができ、一方また逆に『法華經』が『ルカ福音書』より題材を得たとしても、『法華經』がキリスト教有神論の根本思想を捨象し去っていることは明らかであると言えます。今一度キリスト教の受肉と贖罪に具体的に象徴される愛、人格的神人感応の基調において、キリスト教の根本的性格をたしかめてみたいものです。

「神はそのひとり子を世に遣<sup>つか</sup>わし、その方によつて、私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣<sup>つか</sup>わされました。ここに愛があるのです。」(第一ヨハネ4・9、10)。

《注》

(1) Saddharmapundarika° Saddharma は sat 「在る」・「真の」・「正の」・「善の」と、dharma 「法」・「教え」の合成語。pundarika は

「白蓮」を意味します。

(2) 山口光圓著『法華経講話』（立命館出版部）一八〇二〇頁を参照。

(3) 賀川豊彦著『東洋思想の再吟味』（二燈書房）一四四、一五一頁。

(4) 「声聞」とは佛陀の教説を聞いて悟る者のことであり、「縁覚」とは別に佛陀の音声を聞かずとも、飛花落葉など天地自然の変化という外縁によって悟る者のこと、師なくして悟るので「独覺」とも言われます。大乘仏教では、この両者は自利を理想とする低い佛道修行者とされ、合わせて小乗二乗と言われます。

これに対して、「菩薩」とは、自利・利他の境地に達した者のことで、大乘の人たちが、自分たちも佛となれる身であるというので、自分たちの通称に用います。

(5) 『法華経』提婆達多品第十二。

(6) 『法華経』提婆達多品第十二。

(7) 宇井伯寿著『佛教汎論』（岩波書店）六三二―六三八頁参照。

(8) 「三車火宅」の譬喩とは、朽ち古びていた大長者の邸宅が火事になりましたが、中で遊びに夢中になっている子供たちは避難しようとしません。そこで長者は、羊車・鹿車・牛車が門外に備えてあるから出て来て遊びなさいと言うと、子供たちは争って戸外に走り出て、火災の難から逃がれました。しかし、外に出てみると、羊車・鹿車・牛車ではなくて、七宝莊嚴の大白牛車が、それぞれに与えられたので、子供たちは大喜びをした、という筋です。つまり、火宅は迷いの世間をあらわし、遊び呆ける子供たちは凡愚な衆生をあらわし、三車は三乗をあらわしますが、火宅より出するために佛は方便として、それぞれの機根にあうように、三車つまり三乗説を語られたのであって、本当は一車・一乗という思ってもみなかった大白牛車が与えられる、つまり、みなが佛となれることを明かしたものと解釈されます。

(9) 『法華経』（坂本・岩本共訳）岩波文庫版上、二二五―二三九頁。

- (10) 『法華經』岩波文庫版上、四〇一～四〇三頁。
  - (11) 堀 竜淳著『法華經講話』(身延山久遠寺) 四五～四八頁を参照。
  - (12) 庭野日敬著『法華經の新しい解釈』(佼成出版社) 第一卷 一九九～二二〇頁。なお、『山室軍平選集』(同刊行会) 第三卷、九～二八、二八〇～三〇五頁にある「放蕩息子」の喩」の説教を参照すると、同じような調子で興味あることでしょう。
  - (13) 『法華經』岩波文庫版上、四〇二～四〇三頁。
  - (14) Moritz Winternitz: Geschichte der Indischen Literatur, Kap. IV, 303. 邦訳『印度佛教文学史』(中野義照・大佛 衛共訳・丙午出版社) 註二二八。『Lukas 15』の「失はれたる子」の比喩は全く異なる傾向を有す、余は、それらの関係を信ずること能はず。
  - (15) 聖徳太子著『法華經義疏』国訳一切經(大東出版社) 經疏部十六。三〇六頁。
  - (16) 金銭のことと言えば、『ルカ福音書』にも、「放蕩息子」の直前に、「十枚の銀貨」の譬話があるのが興味をひきます。もつとも、これにしても、「あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起るのです」(10)と解題されているように、天に、神に、吹き抜けており、金銭はあくまでも、神人邂逅を物語る題材とされております。
  - (17) なお、「長者窮子」には、あとに偈頌<sup>げしやう</sup>がついており、詩文の形で譬話をくりかえす形式となっています(『法華經』岩波文庫版・二四二～二五三頁)。そして、散文の方の譬喩(長行)と、この詩文の偈頌との間には若干の相異があらわれており、長行の方には偈頌にない記述が多々見られます。このことからして、長行と偈頌は同時に成立したものではないと論ぜられ、より簡単な偈頌の方が先に成立して、長行はあとで付加・付記を施したのであらうとされたりします。しかし、また偈頌は長行の内容をくりかえして、詩文の形であらわしたものであるゆえに簡単になつていくということも考えられないことではないでしょう。
- それはそれとして、法華經学者も―偈頌に比較してのことですが―長行の「長者窮子」譚が、いささか説明に過ぎていると語っているのは、当面の評価に参考となるでしょう。すなわち、「斯くの如く、長者窮子の譬喩も話の筋が長者偈頌に於て相異して居、長行の説明は偈頌に比して詳細であるが、同時に説明に過ぎた嫌<sup>あざい</sup>があるやうにも思われる。長者晩年の病氣は佛伝に照して差支へ無いとしても、悶絶した窮子を一旦貧里に放免したとは何を意味するのであらう。詳し過ぎて返って説明に困りはしな

いか。開会<sup>かいえ</sup>思想の譬喩としては長者の病氣も邪魔になりはしないか」(布施浩岳著「法華經成立史」(大東出版社) 一三五頁)。

とは言え、そのより簡単な偈頌の方にも、「子を見てよりこのかた、すでに二十年」の間、息子と面とむかいながら親子の名乗りをあげなかったという不自然な筋書は録されているのであって、これもあまりに理に走り、説明に過ぎた嫌いがあるとは言えまいか、ということです。

- (18) 増谷文雄著『佛教とキリスト教の比較研究』(筑摩書房) 二七八頁には次のような一文がありました。「二人の父はともに、その流浪の息子の帰り来たらんことを希<sup>ねが</sup>んでいた。その息子が帰って来たときには、その父たちの喜びはなにもにも喩えがたいほどに大きかった。だが、その受けいれ方はまったく相異<sup>ちが</sup>つて、際<sup>きわ</sup>だった対照をなしていたのである。一人の父は、その息子を見出すやいなや、走りよつてその首をいだいて接吻した。また、直ちに美衣を着せ、美食を与えて、善良な兄をして怒らしめるほどに歓待した。だが、もう一人の父は、そうではなかった。彼はその息子に相應しい業を与えて、次第に彼がよりよき人間性を開發するのを待った。形成的段階が一步一步と導かれ、高き形成が彼のうえに実現されたとき、それに相應<sup>ふさわ</sup>しく彼を遇した。いずれも、それは父の愛の表現であつた。だが、一人の父においては感情が物言い、一人の父においては理性が支配していた」と。この書全体の調子からして、ここでなされている感情と理性との対比——言うところの理性に対する感性は、いかにも浅薄で激情的な薄汚れたもののように印象づけられています。それを脱色しさえすれば、いや、二十年間もの間、親子の名乗りをあげぬことの不自然・不条理をもし理性的と呼ぶならば、あえて一触一発の親子再会をもつて感情的と呼ばれる言い分を喜んで甘受したいと思います。

- (19) たとえば、最近では石田英一郎著『東西抄』(筑摩書房) 所収「二つの世界観——日本と西欧の文明史的位置づけの試み」四七、六八頁などは、その典型的なものでしょう。また、古典的には、環境決定論的な和辻哲郎著『風土』(岩波書店) がそれで(二四—二〇頁)、この種の諸論文の出発点であり帰着点となっているものです。

この点については、拙論「神の《母性》ということ——砂漠型・男性原理の検討」上・下(『基督神学』No 8、No 9。東京基督神学校紀要)を参照。

- (20) Archbishop Trench, Parables of Our Lord (Routledge) p. 324.

(21)

『東方聖典叢書』(Sacred Books of the East, 49 vols.)の編纂者で、高楠順次郎を教え、日本印度学の父とも云われるマックス・ミュラーの評言。「佛教くらいわれわれを絶えず思い起させる宗教は他にない。しかし佛陀の教くらい人を真理から遠くに離れさせる宗教はない。佛教と基督教とは、宗教の最も根本の諸点に関して、正反対の両極である。佛教は、高い力に依りすが  
る感を見失うから、最高神の存在そのものを否定している。基督教は、神が父、人の子が神の子であり、われわれが神の子を  
信ずることによって神の子である、と言う信仰に全く基づいている」(マックス・ミュラー『宗教学概論』Friedrich Max Müller:  
Introduction to the Science of Religionへ比屋根安定訳・誠信書房へ一八〇、一八一頁。)

[Abstract in English]

## Contemplation and Impression: Correspondence between Hokekyo (the Lotus Sutra) and the Gospel of Luke

S. Obata

Similarities between the story of “The Richman’s Impoverished Son” in *Hokekyo* (the Lotus Sutra) and the Biblical story of “The Prodigal Son” in *the Gospel of Luke* have been much emphasized. By focusing on their dissimilarities, however, this study attempts to illuminate the basic tones of the teachings of both Buddhism and Christianity and to contrast Buddhism’s philosophical nature in terms of “Contemplation” with Christianity as the religion of “Impression.”



〔日本語要約〕

観照と感動

—『法華経』と『ルカ福音書』の照應—

小 畑 進

『法華経』信解品の「長者窮子」譚と『ルカ福音書』中の「放蕩息子」の譬話の相似性については云々されたことはあるが、ここに、むしろその相違点を描出して、佛基両教の基調を問ひ、佛教の「観照」の哲理的性格に対するに、キリスト教の「感動」の宗教たるゆえんに光をあてたい。